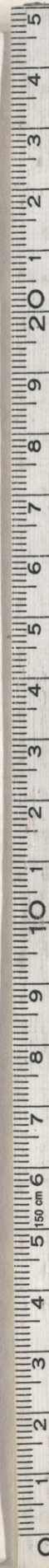


駁臺雜話

四



駿臺雜詠卷四目錄

駿臺雜詠卷下目錄

智集

燈臺とやうに燈

はとにほのこ

はとく羊

源於委

恭時此云

足利家此礼

兵法の大事

兵と詭道

運筆の口傳

鴟鵂のゆき

青砥の續松

大佛の鐵

楠心成

武田信繁

孫贖韓信の兵法

不忘向君

駿臺雜詠 卷下 目錄

後集雜詠卷四

燈臺とや暗し

三伏の夏もとも半過りし一落人しすもこころら夜都
みよの菴いぢよとあらしひまらちおあし積せき多た新あらたよ暮くれて夕日ゆづり梢のの
 下まふよなほ竹樹露ちくじゆすけく池いけの芙蓉ふゆ風かぜあぢるやふ
 とや身みとくしあしあ折おりしやあも誌しあうわくはく
こころ句く欄らんよあましく詩しあし朗詠らうぎしんあそやあわやあもん
 えあそりよに暮くれゆけハやうく肉にくよ今いまあはいとあやうさあ
 やいああとあはしとわれハすくハ宵よの万ま遠とほく程ほどあまあま
 て池物いけもの結むす取とれんとも各おの望ぞまほすともああはらあまあま

燭ろうとててももややりりふふ前まへゆゆややおおとといいまますす一一燭ろう基だいととははし

てて世せ俗ぞくのの競こいはは燭ろう基だいととやや暗くらししとといいまますすいいまますすののままににあ

らら中ちゆうとといいまますすややおおとといいまますすととああままはは度たいああららるる

申まをひひとといいまますすいいまますすとといいまますすとといいまますすとといいまますす

とと其そのとといいまますすとといいまますすけけにに却かへつつとといいまますすとといいまますすとといいまますす

ししにに但たゞ我われ等らのの思し見けん中ちゆうにに是こゝにに及およぶぶとといいまますすとといいまますすとといいまますす

在あつてて邇ちかししくく求もとむむとといいまますすとといいまますすとといいまますすとといいまますす

とと志こゝろとといいまますすとといいまますすとといいまますすとといいまますすとといいまますす

中ちゆうにに是こゝにに射やるる若ごとくく其その的てき的てきのの志こゝろとといいまますすとといいまますす

とと志こゝろとといいまますすとといいまますすとといいまますすとといいまますすとといいまますす

願ねがひひもも同おなじじとといいまますすとといいまますすとといいまますすとといいまますすとといいまますす

春とあはれぬ人多く多きけ。地まのこやうくも幾くもあや

春もも何くも後になれん。亦心をも聞て、さよは共す

あくぬ。羅大雅。鶴林玉露。悟道とつる尼の作やう。

畫日尋春不見春。芒屨踏遍隴頭雲。歸來笑撚梅花嗅。

春在枝頭已十分。

是も後のちつ後よちてなきよおら多くとす。心あもやう山

野。春と為くして。春とさうよわの梅くわぬすをさう

まやうの心も。地まをやうくもさけさやとよくわなれて。い

ちおとさうくあやうの又心をも。道はさうくもさよも陽と

以。外のすちをわぬる。たやうは東晋の時。桓温三秦に

お入しはあて。王猛来見しはけふ。之秦は豪傑のふそく。い

あり一人も及ぶ事らぬと同一也。桓温、眼のくらき也。志
 野道くらき。秦の豪傑王猛よる多かりのやわたりき。眼ぐんお
 り豪傑わたりき。眼ぐんくらき。豪傑よむらき。豪傑と同一也。
 燃も基きとやくらき。きくらき。又また也。古こより倭漢わんたよ。
 英えいとい遠えん畧りやくとけむり。其その威い望ぼうを敵てき國こく及およぶ。ま
 ちく蕭牆しやうきやうのそやよ敵てきわたり事こととくらき。燃も基きとや暗くら
 きよふとくらき。を代しろ日本にほんとくらき。織田信長おのだのぶなが関東かんとう関西かんせいの
 諸國しよこくとくらき。討うちたつとくらき。手てあふくらき。し
 て明あ智ちよくらき。燃も基きとやくらき。わくらき。和わとくらき
 と。氣きとくらき。比ひ喩よの倍ばいと義経よしかげのそやくらき。くらき。

中ちゆうさう物ものくらき。け後ごも各かくあり。其その義ぎとけくらき。

と氣をつけて、すなわち此の儀の儀と義理のさやちやちやくは、

中さう、物中く、け、後も各ありひよ、其義とけくさき、
中、さう、やけ、印、わ、あ、ま、さ、く、付、ら、但、名、の、中、さ、う、無、
い、後、も、燃、基、を、晴、く、と、わ、き、く、さ、う、あ、く、附、ら、く、よ、
く、い、初、と、又、け、後、の、所、き、方、ま、た、な、り、て、さ、く、及、し、其、儀、也、
又、一、程、の、乃、理、も、わ、か、り、さ、く、也、（転、退、之、）、（燃、基、の、後、）、（長、繁、八、尺、）
空、自、長、（燃、基、二、尺、便、且、光、や、傳、ま、る、と、く、）、（燃、基、も、長、き、）、（燃、の、）
と、さ、く、ら、く、也、（燃、基、を、燃、の、と、や、わ、り、は、中、に、書、き、の、字、を、）
さ、く、ら、く、の、事、中、に、も、の、や、と、附、ら、く、さ、く、て、其、月、を、さ、く、ら、く、
也、（燃、基、を、燃、の、と、や、わ、り、は、中、に、書、き、の、字、を、）、（二、尺、の、）、（燃、の、）
を、燃、の、と、や、く、也、（わ、ら、く、ら、く、）、（燃、基、を、燃、の、と、や、わ、り、は、中、に、書、き、の、字、を、）
を、燃、の、と、や、く、也、（わ、ら、く、ら、く、）、（燃、基、を、燃、の、と、や、わ、り、は、中、に、書、き、の、字、を、）

後、中、に、書、き、の、字、を、

造の辭と審ふせん。雙方の情とあはるる事やしんぞ。必障

子と為るごとく。こぞや。子けり。そ業と。業と。や。と。一。多
ら。此。ち。ら。ぬ。や。り。あ。り。て。さ。う。ま。し。と。や。さ。さ。ら。ん。と。さ。代。の。人。と
ハ。い。や。す。く。お。の。け。く。聖。人。の。心。も。わ。た。る。ま。さ。ま。の。曲。直。理
と。ま。し。聽。斷。神。よ。每。く。人。々。畏。服。せ。ら。る。と。や。り。と。ゆ。り。用
悔。而。明。や。り。わ。ら。し。け。や。今。よ。ま。し。世。の。後。者。は。く。彌。く。て。口
實。と。す。り。事。枚。卷。す。け。よ。と。わ。ら。し。中。や。も。難。く。最。感。一
お。し。ふ。事。わ。り。同。務。さ。わ。り。時。ま。た。在。家。と。あ。ら。ま。し。ふ。さ。ら。家
よ。幼。少。の。子。お。く。わ。さ。り。お。わ。き。同。務。さ。わ。り。あ。ら。ま。し。と。い。は
と。同。務。さ。馬。と。中。く。聞。ら。う。や。く。我。子。有。と。い。ふ。と。此。所。代。官。と
ま。く。あ。ら。ま。し。凡。系。中。村。岡。は。任。す。者。男。女。老。弱。と。い。ふ。我

及不... 卷十一

とわあゝとじていさむわくゝん志まよけ表の思華
 わいふと者よ家人の家どうもてわい子世聞訓かきとに
 せく下。是と定むく子知わくゝとて。其表に此名とまの
 せく母とまの。聖日よ其表とまをせく。汝出き行わくも
 内秘い多ぬすわわい今君ぬれわわくもきけり此事
 せくとやう。わいじやうにすくやいとまの。其始とやう
 せ辞退志いたたぬ。再とてまのけとわくさのしとひとま此
 せとまの月たすせくひ父の配分たいぶんのすよ揚つぎ一取の者や
 年としひく内うちへい。其若わき實じつの事とすけせも。能人とくじんとも
 と多くあつたゆとすわい所聽き改たへの上相子の務と定よりひ。

其表をわくゝとてはるを修ら下役人の命とく。其下に

明おのけりしをきさんおのり。平屋中此道と聞ゆて目
 おきし。このやうに。い。と。一。様にして。と。や。わ。り。ひ。か。ま。は。は。
 其のうら。い。ふ。を。して。や。ま。ね。小。人。の。道。を。酌。せ。て。目。の。あ。ら
 ぬ。お。の。り。し。け。理。と。あ。り。て。明。の。や。う。に。あ。の。と。必。き。や。と。
 と。ら。い。す。や。り。ふ。ら。や。い。地。基。を。や。ら。し。と。い。ふ。や。も。わ。ら
 じ。系。に。依。け。続。の。正。念。と。各。の。い。ふ。と。く。成。り。し。お。の。り。し。お。
 ち。片。姉まへく。一。親。ま。お。お。お。い。う。と。さ。く。も。根。も。や。り。す。中。に。お。あ
 り。け。り。貴。會せん議ぎの。中。に。く。い。お。お。お。い。う。し。お。ま。は。は。は。あ。こ。の。や。り。し。
 事。や。い。お。の。り。し。け。ま。し。ま。し。や。り。し。や。り。し。や。り。し。や。り。し。や。り。し。
 各。感。一。お。の。り。し。

運うんののはは傳でん

運うんののはは傳でん... (faded text)

各感一わたり。

運うんのはく傳でん

さくく翁おきなひひひひ月つきとと壘うゑまま及及虧く心こゝろとと盛さかややのの道みちははちちのの家け
始はじめ子路持波しよらんの道みちとと孔子こうしの向むかひははは聰明そうめい睿智そゐいとと之これ以もつ愚ぐ
ややのの心こゝろとと翁おきなのの心こゝろとと明あきらとと晦くろとと其その心こゝろもも聰明そうめいとと十分じふぶんに
ああるるややのの心こゝろとと物ものとと十分じふぶんににははくくまま成な成なりりああるるやや
ととすすのの心こゝろとと七八しちぱち分ぶんあありりててああららううととああららううととああららううととああららうう
ららのの心こゝろとと一いっ旦たんああららううとと必かなら後ち悔くわいととああららううとと或ある人ひと
佛ぶつ作さく運うんとと傳でんととはは傳でんとと佛ぶつとと傳でんとと耳みみ鼻はなとと先まづ
大おほききととすすとと耳みみ鼻はなとと十分じふぶん能あたりりとと斷きたたららししとと後ちああららううとと見み
ゆゆのの心こゝろとと大おほききととああららううととかかららははららししとと月つきとと先まづああららううととすすとと。

後のちにに傳でんとと卷まき之の四よ

也陳の公子完齊の桓公の多ち親をせしむる。桓公其家

は物と物と一と書とちくもわさしてはせむ。大ととく
はけやいともと居し其書抹し其業とく物故と隣世
人の物と居くさくや也人の我為と青同とけさすすにて
はけちやらさぬ人の忠をいふ人の忠を十分は頼む
ふすちうとさうは必らむむかしの聖人易の恒卦は
て初九九二は求をのんゆきぬすめて後恒貞凶とさる
人の忠を居くさくやなむ。あささく君中とわけて人の物を
盡さん人の忠を竭さるて人を始終交を合するは
一國家は改むるは其理同くはせしやしき後よる
よる。國はは居るすも亦やく神の底とまをいらす

易経

七

新編 皇朝 卷之四

七

すしとすま本う行う。ぬとしぬわま。其りそ。ぬ下。之。ま
 て。の。く。度。ら。美。事。の。よ。け。さ。も。す。の。ほ。ふ。久。し。じ。て。あ。け。ら
 り。そ。々。ぬ。ぬ。ゆ。り。地。此。令。と。嚴。あ。て。急。よ。り。そ。々。す。に
 や。す。の。と。さ。と。依。よ。り。そ。々。す。の。と。わ。ら。い。所。よ。さ。さ。と。出
 事。と。騷。動。を。も。る。そ。う。易。は。王。用。三。驅。失。其。禽。と。之。也。
 天子の獵と不合圍と。網の二面をわし張く一面を其禽
 のよきうち地跡をさ其と。政事のおろやろく。や七八
 分程あてて二と分を跡をさもとく。つあやろと。詩。い。ち。く
 彼有不穫穉。此有不斂穢。彼有遺秉。此有滯穗。伊寡婦
 之利。あま田畝の事。す。周。時。と。寛。政。わ。下。遺。利。わ

る事とさくく。又十分よとささく。若禽と其のり
 之。と。さ。さ。く。く。又。十。分。よ。と。さ。さ。く。若。禽。と。其。の。り
 之。と。さ。さ。く。く。又。十。分。よ。と。さ。さ。く。若。禽。と。其。の。り

之利^リある田^カ畝^カの事^ズす。周^チ時^トは寛政^ワあり下^ノは遺利^イあり

る事と云く。又十分はあさる。昔禽と云ふのんは
翁嘗て歴史と考ふ。漢と文帝とあり。帝と仁宗とあり
最善はもや。好^ク二君^ノは寛大あり。政事
か。治事や。治事や。安^ヤ文帝の後武帝とあり。張湯と
弘羊とあり。威怒と十分はきば。貸利と一毫も遺
さる。是より。重^シ茶毒^ク。民心離^レ散^ル。漢家の危事。殆^シ累
卵^ノの^上に。仁宗は後仲や。安^ヤ。王安石と惠^ク卿^ト等と用
了。新法と造^リ。功利^ヲ趨^ク。是より。朝野^ノ騷擾^ス。民心^ノ愁^ム苦^ム
宋朝の獨^リある。濫觴^ノ。是より。二君^ノを英明^トの^事と云く。わは

宋史 卷之...

ふじてして... 材力... 驍... 法... 驅... 驍... 法... 驅... 驍... 法... 驅...

宋史は史臣仁宗を賛して、はく、

四十二年之間、吏治若偷惰、而任事薄殘、刻之人、刑法似

縱弛、而決獄多平允之、士國未嘗無磔、而不足以累治

世之體、朝未嘗無小人、而不足以勝善類之氣、君臣上

下惻怛之心、忠厚之政、所以培植國基者、厚矣。

此賛よく仁宗此朝を推論して、その理とあるや、そとよく

及ぶ。仁宗此朝君臣とよく聡明とよく寛容とよく

や、多とよく識とよく驅、若禽の遺風や、

法と江河のあ

やまきと多と織と驅方本禽の遠見ヤ

法と江河のおと

さうまは古人と人君と貴明不貴あふとさうま明とあふハ
ゆるゆる事し明と始事やく庄と照とさうま。其まきあう
其本物とけんまきさうま。中とあうの照まき。あふと始始あて
物と照とさうま。さうまやわらけてあてんさうま。さうま
さうま。さうま。あてあて。あて。人君の明と
始事とさうま。始事とさうま。さうま。天下のはと寛大
あて江河のさうま。始事とさうま。溝渠のさうま。さうま
法江河のさうま。さうま。さうま。さうま。さうま。さうま。さうま
あてあて。さうま。さうま。さうま。さうま。さうま。さうま。さうま

志多けきよけに。きも。は。校りて。まはきや。と。さ。た。は。
 犯たう一。ま。は。さ。は。ま。よ。ま。そ。昔。あ。ま。は。河。と。踏ふみわ。ま。ま。を。て。ん。ま。の。
 への。あ。ひ。と。き。ん。ん。博。集はくしゅう。ま。ま。も。し。す。は。け。あ。る。の。多。く。お。
 こ。と。と。く。後。漢ごかん。の。却。黜かく。安。帝あんてい。よ。と。け。る。書。ふ。ま。若。の。は。ま。
 江。河。の。あ。ま。易。避えきひ。く。犯たう。犯たう。と。ま。古。今ここん。石。易。能。名。言なごん。
 と。い。ま。し。さ。ま。ま。あ。わ。た。ん。と。い。ま。一。句。は。寛。大。や。る。や。
 う。い。や。す。い。と。い。ま。も。わ。ん。は。と。科。條かじょう。と。叙。罪じゆい。して。は。今。
 煩。苛はんか。な。る。と。悪。む。と。い。ま。の。こ。ま。ま。よ。ま。寛。大。や。る。と。
 や。す。と。と。い。ま。の。ま。ま。ま。ま。ま。と。嚴。急げんきゅう。よ。す。と。貴。ふ。
 魚。い。ま。の。泰。平たいへい。の。世。と。民。俗。悲。情みんぷくひじやう。は。流。と。驕。奢きやうしゃ。と。好。ま。

抄。今。と。流。ふ。と。一。ま。ま。と。ま。ま。の。易。と。し。

夫の如く泰平の世に民俗趨情は流と驕奢を好す

世に今を治るふと一を事とせり。俗易と作し
くく。舊弊除くべきや。世に必改革と革め。法令を嚴
めて。民の耳目を新よす。世に治るふ民と可共樂成不可
共謀始せり。民と治るふ。一して例をの利病を去るん
多し。私利害とのとせり。する故に。其の此始せり。己の猶子
とわく。衆を母とせり。衆務競起り。突然とあらく。なすあり
う。古より明智の人とせり。少くも拘らるん。其功とせ
然し。何んぞ。畢竟天下の利とせり。加ふ。けお中々上下安堵
とせり。治るふ。に治るふ。その心。此暇とせり。遠き
と世にの明とせり。治るふ。とせり。小智於世に人治る

夫亦わらぬむら 鄒の子産 鄒國の政をせし 舊作の弊
 を改む。子産の事 車服の驕と禁め。田廬此制とせしめ
 し。凡そ客人おきよとく。衣服は獨よく。し。其の
 意をすの回たあつて取とて 鄒伍し。為りてま
 さは行よ 粵人の事。う。為よ 補して。い。取我衣冠而褚
 之。取我田疇而伍之。孰殺子産 吾其共之。とて。起せ
 し。や。ら。子。及。強をの。凡そ。侵暴の害除き。ハ
 亦補して。い。我有子弟 子産誨之。我有田疇 子産殖之
 子産而死 誰其嗣之。とて。あ。ひ。よ。あ。丁。ひ。の。ヤ。ハ。子
 産と 惠人か。す。や。孔子との。好む。其。政。民。を。表。す。

子産の事 夫亦わらぬむら 鄒の子産 鄒國の政をせし 舊作の弊

舞と惠人かろすや孔子との好むく其政民とを去す

すはすゆくすくすも。望とく寛と貴すわら民。徳も
乃き時をかくわす。其後政と子太叔は按く。時子太
叔の寛よ過む事とあて成さくさす。必と烈を去く
民令とく畏る。あふたふ令死す。あふたふす。あふ
懦弱あつて民押て。あふたふ多し。死すや。あふ
けら大井多とくも。あふたふに。あふ溝渠の定と同一く。
徳とけ古の明と賢相と寛とあやす。あふたふ。あふたふ
徳とも。あふたふ。あふたふ。あふたふ。あふたふ。あふたふ。
徳則民殘殘則施之。以寛寛以濟。徳徳以濟寛政
是以和や孔子との好む。一偏中とを去く。あふたふ。

後漢書 卷之四

三

新編 皇朝通志 卷之四

鴿鳩のゆゑ

多し國をこの事無く大少よるは國勢民瘼ハ改ちせんハ
わろくしつ其の事あるやきうくえ高貴よあまて改めさるるよ
いと其北道たごのけくまの恙うらまも高貴きうせいを改く新を仕
かゝるはと一旦務子ハ能やうやまゐるも其守るるをく
争まきつてやると其用をせして廢るは流小海へ
わくやとらにさるあまよはしく多くと却て己のほう
をいふや中程ふやくともいひなきや如く其しあまた
うまきぬるや清はわたり鴿鳩を畜ふてそとを固かめそ
多たく捕とらふは同一く殺生すは女なるもたよまゝとて

とがよき越はぬる其の事よみはせを畏くはくやの幾

こけは地蔵とてまじりて其のまじりてけ。ゆゑに
 又でまじりてまじりて其のまじりてけ。ゆゑに
 別ぬ人のわけすじりまじりてけ。ゆゑに
 ますよあらぬまじりてけ。ゆゑに
 事ゆゑにまじりてけ。ゆゑに
 仕切ぬまじりてけ。ゆゑに
 ハちふれぬ中中と國家のゆゑにまじりてけ。ゆゑに
 也古のまじりてけ。ゆゑに
 とおし。常改と改めす。まじりてけ。ゆゑに
 よ二つとまじりてけ。ゆゑに

とまじりてけ。ゆゑに
 とまじりてけ。ゆゑに
 とまじりてけ。ゆゑに

よ二にうと蓋わおすともわさや。たうとと逆効とつと及て遠慮

と志き。事の易きやのと思く。往きや去る。さら往よ思
のゆよさならす。おろくおせく。貨財と費し。人力と耗し。な
うら。何の甲斐や。さすに。なるやう。あつと。わさる。毛や
ゆく。病と求ぬ。凡や。して。彼と生る。忠厚。此。凡。日。は。敷き。
奔競の。あり。日。は。長す。の。往。よ。多。ら。ひ。小。利。と。ゆ。ら。え。や。う。く。國
家の。害。と。貽。と。う。好。き。よ。わ。ら。ぬ。ん。や。和。雅。字。の。良。法。如。策。
先代。よ。う。と。用。ひ。は。ま。く。天下。の。耳。熱。し。月。別。し。事。久。し。か。や
此。類。と。極。く。志。を。い。は。す。わ。ら。ぬ。ん。事。の。肥。し。宰。中。よ。志
は。く。法。と。愛。し。ん。さ。八。唐。庚。存。意。の。海。と。わ。ら。け。お。ら。る。國
家の。害。也。と。常。よ。民。の。耳。目。は。習。と。する。る。く。不得。已。よ。也

支那の歴史 卷一 一〇 一五

此の如くや。御世は一種の儂人^{ぶんびと}なりて。是好と云ふは。侍をこれ
 け彼の名利と云ふは。閑寂と樂しむと。同字なり。ゆをく作。
 猶と云ふは。多し。ゆをく作。侍は。高作^{たかろうと}と云ふ。
 は。絶書と云ふは。事及ぶ多し。其後伊弉諾^{たちえさのあうた}も。橘原忠^{かほのむね}の如く
 仍て伊弉の御^{よめ}に赴き^{まむ}。せりや。女忠^{めのおと}の如く。迦世^{あまのよ}の事
 園方^{えんたひ}に載^{のせ}て。其時の如く。ゆをく作。ゆをく作。ゆをく作。ゆをく作。
 論^こらひ。父はゆをく作。隠途^{かくち}と云ふは。名利と云ふは。ゆをく作。
 よも。隱者^{いんしや}の標^{しるし}と云ふは。ゆをく作。ゆをく作。ゆをく作。ゆをく作。
 余願^たく。諄^{しん}と云ふは。ゆをく作。ゆをく作。ゆをく作。ゆをく作。
 去^いく。海奔^{うみへん}と云ふは。ゆをく作。ゆをく作。ゆをく作。ゆをく作。
 見織^{みおり}と云ふは。ゆをく作。ゆをく作。ゆをく作。ゆをく作。

下段に引け行我の如く。ゆをく作。ゆをく作。ゆをく作。ゆをく作。

よく海奔と居る。おのれ見織、わが之後、さき中、位知る

一陽し、いけね我のあゝを、あ子とよきと、取る。幸實
と祀、い書。二鏡、常本、お居、す、れ、り、を、い、け、り、も、あ、ら、ぬ
よ、の、あ、ら、ぬ、た、り、す、る、あ、ら、ぬ、は、い、ち、く、あ、き、さ、く、付、き、と、さ、さ、い、
世、此、流、弊、や、ま、り、け、い、く、せん、其、界、さ、す、す、け、け、好、父、の、さ、る、あ、て、團
よ、あ、ひ、さ、ら、す、も、あ、る。中、中、を、海、源、氏、お、り、す、と、す、さ、ら、年
翁、や、る、男、女、中、を、林、お、り、て、見、す、あ、ら、き、物、を、淫、乱、と、あ、ま、り、媒、と
も、あ、ら、ぬ、く、い、。あ、ら、ぬ、は、薦、伸、家、よ、源、氏、物、居、と、我、國、此、實、と
い、れ、り、い、い、あ、ら、ぬ、と、さ、ら、い、定、て、倭、語、の、あ、ら、ぬ、と、い、い、ん
確、く、あ、ら、ぬ、す、と、あ、ら、ぬ、す、い、ち、あ、ら、ぬ、唐、子、あ、ら、ぬ、と、あ、ら、ぬ、
家、通、の、林、実、と、あ、ら、ぬ、也、さ、ら、ぬ、と、あ、ら、ぬ、世、け、あ、ら、ぬ、と、位、知、り、一、篇

海奔と居る。おのれ見織、わが之後、さき中、位知る

競あし。毛詩モウシは淫奔インベンの詩とありて。勸懲クワンテイとある。人
 の戒世ケイセイの教とす。然しかし。信しん作しやくよし。子こ孫そん定ぢやう本ほんす。くく
 一いつ中ちゆうととかかももはは。二に南なん八はち脩しゆう牙が齊せい家かのの本ほん。雅頌ガソウとと詩し送そう述じゆつ
 德とくのの粹すい也や。國こく風ふうととやや。上じやうをを聖せい巷かう。子こ男なん女にょ名な言げん情じやうのの詩し也や
 也や。正せい中ちゆうもも邪じやももああまま。其その邪じやとといいふふ。媒たい姪しよよくくははくく
 淫いん奔ベンすす。然しかし。ままくく。いいけけまま。后こう妃ひとと淫いん。後こう母ぼ寡くわ嫂そうよよ
 淫いんするする。然しかし。本ほんややわわれれ。又また伊い摯し源げん氏しののよよくく。邪じや淫いんのの本ほん也や
 始し終しゆういいちちあありり。ててああららわわれれ。ままくく。心しんととああららわわれれ。ははくく
 邪じや知ちくく。邪じやととああららわわれれ。伊い摯し源げん氏しののよよくく。伊い摯し源げん氏しのの
 長ちやう恨こん歎たう。西せい廂しやう記きののよよくく。其その兄ぎやう長ちやうあありり。醜ちゆう惡あく也や

多た也や。一いつ中ちゆうとと聖せい人じん垂た教きやうのの書しよはは。ははくく。子こ孫そん定ぢやう本ほんす。くく
 多た也や。一いつ中ちゆうとと聖せい人じん垂た教きやうのの書しよはは。ははくく。子こ孫そん定ぢやう本ほんす。くく
 多た也や。一いつ中ちゆうとと聖せい人じん垂た教きやうのの書しよはは。ははくく。子こ孫そん定ぢやう本ほんす。くく

張君新編 卷之四

に少ゆゆ事もわざと。たゞとて理趣ある事なげん是之侍り。
中^{ちゆう}中^{ちゆう}新念^{しんねん}とてうけ。然^{しか}るよりわらま。月^{つき}をいふは
事^{こと}と入^{いれ}本^{ほん}にや。いひ悔^け意^いとよくや。たとまする人々事^{こと}
物^{もの}あらすと四^しの辰^の朝^{あさ}中^{ちゆう}と夕^{ゆふ}中^{ちゆう}事^{こと}と思^{おも}へ辰^の多^た今^{いま}の一念^{いっぺん}此^{こゝ}
よ^よおろく多^たあらよ。すくなくや。いひ具^ぐとおぼさるると
行^ゆて事^{こと}如^{ごと}くむじとて求^{もと}む。いふ多^たくうもやとてい
うて。事^{こと}如^{ごと}く事^{こと}やう。きやいひ。松下^{しょうか}福^{ふく}尼^にのわら。や
いしとて。うらやとていひ。世^よと治^ちの道^{みち}儉^{けん}約^{やく}とてや。すけ
本^{ほん}波^なのいふ事^{こと}本^{ほん}のいふ。いひ本^{ほん}とていひ。わらうらと危^き
き行^ゆとていひ。安^{やす}まおほやうとて事^{こと}本^{ほん}とていひ。おほく。

の多^たくひ多^たく。いひまも。管^{かん}要^{よう}の旨^しや。聖^{せい}賢^{けん}の意^いも。

き程と云して。安まらばよき事と云はれずや。其の中も

の多しは多し。はけきも管要の旨や。聖賢の教も
かたはぬ。さす。人物伶俐なれば。其の事付く。其理
よわらば。もわれあや。鉄中錦く傭中倭くと云はれ。其
管中よ。豹と窺て一斑と云うとも。いふ也。多しは
頼格や。人とおぼく得し。そ。聖賢の教も。其の
秋門は。隔ち中と云はれ。お。其の事。秋門は。入る甲
斐さ。や。女色。溺ま。一生と云う。今。其の事。汚名
跡。は。傳へ。や。さ。け。き。も。何。れ。す。や。其。事。は。其
も。人。の。隙。に。其。と。云。ふ。也。

ま。砥。傍。松

...

...

去片しやう君子と人としやうとすくまか聖人と
のほり。おも洗心おやく一の益と得るひすくまは徳と
そまらぬ巻中の一傑と。つひにせりしははやおし
やまをすまむ。皆知るといふ。よきやまとおわら。又云
芳族とやんし。お徳と行く。お徳をすくまはわか
やまをすまむ。お徳とせぬ。よきやまとおわら。お徳
言語飲食うけくは徳とすひ物。いふわきまとす
多かる。徳も。お徳とすくま。いふわきまとおわら
お徳とすくま。お徳とすくま。いふわきまとおわら
お徳とすくま。お徳とすくま。いふわきまとおわら
お徳とすくま。お徳とすくま。いふわきまとおわら

しやうやまをすまむ。お徳とすくま。いふわきまとおわら

多のやうに國を滅ぼし後世に子多かり其法やするを
 さまや焼死にたかやとて其國を令と後せし事とて
 材藏暗弱思ふを多しとて其子准定源等とて
 少くも其の羽翼をばと為さく於にけり也天下の人を
 係すも其法嚴やとて子して子中驕泰とやするの
 さま焼死の念佛宗とやとて其能事多きの長き
 骨壯やるとわまるとやして優柔不攻なり材力弱け
 其は將率八運策決勝に累なく士卒ハ先登陷陳の骨
 やすさまはと総外忠清の士大将として以て之を振舞
 とも維也と同くをよみゆるとは其時の人とてはた

のや焼死せしけり又統後与貞能を法書中ハ此寵臣

一と維也と同く之を以て等しくす。其時の人十居一たり

よき物事せしむ。又統後与貞徳を法法中より此寵臣
中へ平家全盛の時を壽氣揚ぐ多し。一壽永年中平家
安徳帝と奉去く西海へ赴く折しも貞徳出陣し凱
旋せし。途中中へ車駕へ出合ふ。却て平家引去て於
一平家の勢門は威定す。日危七瀬きと云く。又
逃去く秋門へ入侍。肥後入道や稱し。其後長行源氏
の世中やまら。八徳舎より。宇都宮加保や著藏人
より。一合と助
けらば。抖擞行脚し。わらふ。了ぬ。や。御ひは。一合と

長生巻二 卷之四 三

終つたきよく。恥とてさうたのあきまのこ。そよほけ
 源朝右馬允番うまのせう。すくと感し。侍り義経西国へあつた源朝
 あつて番のつとめとてさうたのあきまは。番あつたそ
 見送つたか。後よ其事も聞へく。園中とてさうたのあきま。梶原
 お侍りしとて。十二とて。源朝の追討使は。其時
 内遠系つて。いふと。源朝のあきま。十世の者となつた
 源朝のすゝめとて。加賀の園とて。其時。源朝のあきま。十世の者となつた
子孫とて。源朝のあきま。十世の者となつた。
あつた。源朝のあきま。十世の者となつた。
あつた。源朝のあきま。十世の者となつた。
あつた。源朝のあきま。十世の者となつた。
 番の妹とて。さうたのあきま。相見つて。園中とて。源朝のあきま。十世の者となつた。

けつと。彼御氣受く。あつた。さうたのあきま。十世の者となつた。

番の妹とわらうと今も相見しつて國事と下仰けぬを京

けしと彼御親愛くあはくもいふも一十世の主人も若所
義河まゝと幸を承りわらうもしやいひまは番親親即等
さすやも人々右馬殿の石^{イシ}居はゆかきと収あつたさ
を景國も中々下りてさすいひし使と番ももさすけはけ
いひまは思ひいけをかく格うさすも女もいひせくは
親ともたのま甘くしく肉和は付く疎畧とあまうさ
やうもあまうさあ番多事の石人ま今もさすあし
あしやいひも十代年よ及ひまはまわらうと一人も
はしやうむれ若さうあまうさうけ多事をもあはれ
らうとさすいひま番のいひまはまわらうさすあ

後巻 巻之四 廿四

是はゆゑハ、静すまゝなれば、日く後くそくを、
 ハ、重衛の幸そく侍ら。其身そくきりて、生捕まゝとて、
 壯辱よわらひ、ゆゑに鎌倉の園まゝ、何と宴遊の席、
 艶女は款待し、たまはば酒をまぎ、何と敬衛の吉子そく
 也、事よ遠近とす、とて丈夫のすく、事そくわらひ、とて色
 事そく、とて、とてそく、とて、恥すして、父令そく、とて、
 ちまひの大佛と燬し、事そく、自ら、とて、大まが、
 事そく、とて、鎌倉そく、頼朝のおそく、とて、陳謝し、
 事そく、とて、遠近とす、とて、けす、とて、
 事そく、とて、罪障懺悔の爲と、とて、
 事そく、とて、
 事そく、とて、

事そく、とて、世に氷弾心、ゆゑに、ひち、とて、大佛と、
 事そく、とて、

うと。罪障懺悔の爲とてせぬとてらるる。その是贖を此とて

考す。世に水彈正と爲る。此大佛と云き。と信を
の極要と云く。是を其大衆と云らる。此大佛と云き。是
好義長と云く。先源院殿と云く。奉じて大逆罪と云く。
是く。この人此をいぬ。此をいぬ。彈正と云く。是をいぬ。
是をいぬ。嗚呼佛法此人を盡感ず。奉じて云く。是を
也。此の寛文の比と云く。松平故伊直も信徳執政の時。寺
等金仙と云く。如彼なる風俗の爲と云く。是は大佛と云
て後。天下を利差せらる。是をいぬ。是の中も此をいぬ。
是をいぬ。其卓織傳と云く。古今は傑也。是をいぬ。是を
創業以後文明日と云く。是をいぬ。是をいぬ。是をいぬ。是を

後巻の巻目 卷之四

七

法苑珠林 卷之四

かゝる人なきまじりてはばらんや。譬^{たとへ}死^し中^{ちゆう}も亦^{また}法^{ほふ}を^をく。まじり
伊豆も善^{ぜん}改^{かへ}多^{おほ}き^き中^{ちゆう}よ^よ始^{はじめ}く^く上^{かみ}座^ざを^をく^く天下^{てんか}に^に殉^{しゆん}死^しを^を禁^{きん}す。諸^{しよ}
國^{こく}此^{こゝ}人^{ひと}質^{しち}を^をや^や也^{なり}。大^{だい}佛^{ぶつ}を^を強^{かう}く^く誘^{ゆう}死^しす。計^{けい}之^{これ}善^{ぜん}世^{せい}中^{ちゆう}も^も大^{だい}善^{ぜん}量^{りやう}
死^しす^すよ^よ以^{もつ}侍^しり^りや^やす。殉^{しゆん}死^しを^を禁^{きん}す^すよ^よ計^{けい}之^{これ}善^{ぜん}世^{せい}中^{ちゆう}も^も大^{だい}善^{ぜん}量^{りやう}
害^{がい}を^を除^{のぞ}き^き人^{ひと}質^{しち}を^をや^やら^らま^ます。よ^よ計^{けい}之^{これ}善^{ぜん}世^{せい}中^{ちゆう}も^も大^{だい}善^{ぜん}量^{りやう}
大^{だい}佛^{ぶつ}を^を強^{かう}く^く誘^{ゆう}死^しす^すよ^よ計^{けい}之^{これ}善^{ぜん}世^{せい}中^{ちゆう}も^も大^{だい}善^{ぜん}量^{りやう}
よ^よ計^{けい}之^{これ}善^{ぜん}世^{せい}中^{ちゆう}も^も大^{だい}善^{ぜん}量^{りやう}
諸^{しよ}執^{しやく}政^{しやう}の^のも^も至^{いた}る^る至^{いた}る^る明^{めい}あ^あり^りて^て法^{ほふ}候^{こう}法^{ほふ}候^{こう}設^{せつ}人^{にん}よ^よ對^{たい}して^{して}私^しの^の
と^とや^やら^らす^す私^しの^の怒^{いか}や^やら^らす^すよ^よ計^{けい}之^{これ}善^{ぜん}世^{せい}中^{ちゆう}も^も大^{だい}善^{ぜん}量^{りやう}
其^{その}威^い令^{れい}よ^よ以^{もつ}侍^しり^りや^やら^らま^ます。よ^よ計^{けい}之^{これ}善^{ぜん}世^{せい}中^{ちゆう}も^も大^{だい}善^{ぜん}量^{りやう}

身持も心... 材智と云く人となす

其威令より行てまう。六徳候能設人も各おそむ情をく。

身持も心よりしあつても已。材智とてく人とあま
つ既に。控柄とてく下とおやとて行れ。徳設人と執政の
威勢よりくし。上は所為又は官を此すよ付く。必而
争て言とあそくらす。昔魯公伯禽魯に入封の時周公
がくめく。平易近民民必歸之との語あり。此諸執政の
周公此語をばけ。くくもやんまよとも。其ん云ありて治通
よのやのまはとの侍。く聖人の心の中をこやうも。六其解は
今よりく。古よ此化用よ盛やうも。上は所盛徳とてりた
うら。此徳執政の力やのまやうも。おら以中よ能く伊をせ。此平易
く。云造他やのく。く。世またく。此やま。す。く。わ。く。ま。ま。

後志長巻 卷之四

わすく。此あもる。退つと。宛中かく。いささしく。けあひ天

あやぐ。徳候一度。賊壘へ向ふ。や。初建定。あて。さ
お。寺の町。某。陣中。鏝と撞る。さ。道相圓
よ。法子。此。あ。け。ま。れ。な。う。や。い。今。そ。く。金。張。の。月。日。と。經
け。れ。の。某。お。と。あ。中。今。あ。や。く。も。賊。方。の。若。又。々。馬。鹿。あ
下。く。其。い。や。鏝。と。撞。く。我。辰。と。撞。れ。す。り。も。わ。し。む。と。撞
本。と。取。ま。せ。く。我。側。よ。五。ら。々。又。あ。あ。ふ。あ。ら。必。撞。あ。中。も。陽
る。ら。以。陰。施。や。し。此。の。の。や。く。も。撞。う。あ。中。も。あ。ら。ん。や
鏝。と。地。へ。お。た。せ。せ。あ。と。や。く。あ。く。玉。を。さ。す。り。御。中。上。賊
徒。批。致。く。あ。の。う。ら。る。俄。く。子。合。せ。お。ま。ら。さ。ら。ハ。鏝。と
撞。ら。う。や。ら。う。と。と。約。あ。け。あ。と。と。さ。く。行。く。け。あ。ま。ま。う

長巻書信 卷之四

廿九

後醍醐天皇 卷之四

おと成志を。多かたをよき事として政法を以て守り、甚だ時を以て
 けりや、さきより方士道草も言ひ為し、御事の事よ
 了せやとあれ事と出で書くや、お事ごとく、高き戯ま
 へる事、物語やとと。伊豆守御事の事とく人のととすべし。
 予も予今馬お事とわ御事、出で、高き此を危しや
 へりや折ゆ。常人やとけ中へお事、出で、高き。た
 ひのひはくやと。け高きととや、此貴事や、出で、高き、
 高き、相人、おんまんとり、御事、出で、高き、我わ、高き、
 も、高き、御事、出で、高き、御事、出で、高き、御事、
 の、高き、御事、出で、高き、御事、出で、高き、御事、

と、高き、御事、出で、高き、御事、出で、高き、御事、
 高き、御事、出で、高き、御事、出で、高き、御事、
 高き、御事、出で、高き、御事、出で、高き、御事、

の大ききものもあつた。世は古今に異なりとす。ものりて

とそよぶる。是とそよぶる。世の権威はほこる。是

備へんと欲し馬援といふ。井底の蛙也。嗚呼。や。小。い。い。

春時の云々

他日残りの令。緒ある日。まゝの人物。月以任。御。中。

て。深念。身。此。人。物。と。多。き。事。よ。り。月。あ。り。り。及。元。

其。中。は。新。の。お。お。人。と。別。く。あ。り。り。及。元。の。お。お。人。

治。世。の。後。は。お。お。小。條。春。時。と。や。漢。の。丙。魏。唐。は。姚。宋。お。お。

う。う。う。ね。人。と。く。あ。り。り。及。元。の。お。お。人。と。く。あ。り。り。

櫻。尾。の。明。慧。は。あ。り。り。某。不。肖。此。所。と。く。う。う。任。は。あ。り。り。

那。下。は。條。と。は。り。り。う。う。あ。り。り。及。元。の。お。お。人。と。く。あ。り。り。

族肅族一。徳舎れ我れも感服一也。明慧浮屠也。

とも孔子此季康子との終ひ一荀子之不欲隆賞之不竊
やい中一也。秦時の明慧の一と信用一と徳舎れく
治まらる一也。聖人の言任る一とさる一と志す一と明慧
も多しや中一也。秦時秦時秦時秦時。後日
あといけとめく一と廳へ出く。心袖とて塞く一と度
常と治らる一とに邪長と信す一と恭謙一と一と年と分
ら知と聴る一と事明おやる一と一と事監とてく一と考とて。考わ
ら老儒の信らとまきし。秦時わら時弘とまきし。一と雙方射
決く一と決く一と事一と一方は初と忽と。理よ服とて。一と事一と已
一と事一と一と事一と一と事一と一と事一と一と事一と。今も考

よき後嗣よ乃く。時頼時宗、けとも遺利とせり。政は

依くうく。政と教らまじり。けり。此の世に人の藩念を為響せり
いなり。如像氏室胡の暗長とまじり。天正此権と執く。教代此
安きと傳へらる。泰時此功とよみ。世に時頼と泰時と
賢明やるやに新ねらる。をたつて。此の世に高
位と脱履とく。浮屠とゆ。傲行とあり。下情とあり。と
と。考物のみや。い。や。い。つ。つ。た。た。と。無。く。た。た。と。ま。じ。り。と。急
人のいよまじり。其の宗廟社稷のなき。改。改。改。改。自。ら。佛
と。逃。を。傲。行。と。樂。と。す。る。事。や。わ。ら。之。者。君。徳。と。穢。治
體。と。ま。じ。り。人。を。此。に。や。す。く。い。は。は。と。六。其。居。規。模
を。小。し。く。を。大。し。く。時。を。あ。じ。出。く。泰。時。よ。乃。之。者

後巻 卷之四

九二

人よわし其系縁余れ人物と考るに。よ下ともすくはる
 多於人なり。多し但建國のうらめ。わある人材。幕下。那
 集まやう。血氣勇悍の人とあて。けさも粗暴云蔵。
 皆降灌。下あて。其中。名山。至忠。勇力。世より。安此
 壯士といふ。志操潔白。あて。きとわく。室
 の人也。世より。和やか。並。静。つげ。この。倫。は。梶。原。の。諫。よ。わ。ひ
 一。時。折。文。と。く。陳。謝。せ。や。い。ひ。一。生。忠。一。生。信。と。い。ふ
 任。是。今。又。折。文。よ。多。き。や。う。さ。う。い。ひ。さ。う。い。ひ。も。頼
 朝。も。教。の。こ。ん。梶。原。も。怒。と。如。し。是。中。く。と。や。を。忠。信。の
 よ。下。に。感。字。す。れ。す。以。て。之。と。く。其。と。己。の。考。は。伐。ら。ず。人。の。功

と教を以てあはせしむ。寛厚長き。此。氣。象。が。ん。わ。り。く。あ。高。時

よ下ニ感字す以本以去之ノ其ノ己ニ事ノ儀ノ人ノ功

と敬とんあけり寛厚長吉此氣象かんわすくあ高時
就將の中ニ事ふ少なき似ら人もなりし事ありて浦と
同く之兼後如條ノ為ニあはさるる事いそひけきさ
たも其家後もさすの他よりさす一きハいささくく
ぞういあさるる時政義時悪天道よさる人なりけり
其罪深くてもゆるあさる泰時がうせ凡如條家此
滅びし高時と何とゆゆしくしひを田樂入道と
罪人なり

楠正成

建武中身代人物中くと鐺神家ノ友藤房翰鈴家ノ

凡世楠家此遺書さへもきましく流布すれどもわきまをわきまに
ハ

後人の偽作や及之傳らるるも甚き事なり。其書は後世の
一書とて天下に傳れり。始に少くも杜屈せざるや。其材
量の多きや。後と見ゆるも。其の作意すまきとて。下
一書の下名は勇士や。その時勢は附く及之と常や。一
朝夕と多ものさる中。楠家の子孫累代に遺
刻とあり。一門國族心を宣ひ。力を發せ。名をたんとく
國に報ひ。之代の一人と戴心をあはすとき。凡古今比類
する多し。正成徳澤深厚なり。下すく人をも子孫あり
たし。らん中。かくのしく。下すく。其の書。凡世此尚論
す。故人推考く。法葛孔明に比する。其の書も。兵畧と
凡

大正十一年一月一日

それと恢復の後も尊氏義貞のよりに列してその任用

とてはくすときつた。孔昭とてよく擧げられたるに其備
わじ。其兵を用らも孔昭のふちありて其計とてらつた。節
制の兵をいふ。新として編する。正成の敵と料す。兵
と用らる。韓信は似る。韓信は韓信の寄食する。既
項上の易割とて。正成の内々存居する。既。録金
の易弱と志は。韓信を従と見。録。項上の兵と
好して。其兵を恐る。よる。正成の敵と料す。兵
後醍醐帝は。録。録金は強き。録。其強き
は。其後友人は。録。録金は強き。録。其強き
用て取勝す。録。録金は強き。録。其強き

水敵と破す。正姫と約戻才偶敵と塵す。と日之兵。友人
 の兵と用らふと一轍は出さる。つらばりとも推堅抗強と之
 や。韓信の材と敏速よ長し。と攻めよ。そのせりとき
 う。正姫の材ハ持重に多し。とよ。さる。よ。さ。これ攻る。其
 乃。韓信は城とさし。し。た。よ。正姫。と。と。や。ら。ん。古。人。も。攻。ち。増
 敵と攻め。た。よ。韓信。と。と。や。ら。ん。古。人。も。攻。ち。増
 殊。と。と。や。ら。ん。古。人。も。攻。ち。増
 韓信。と。兵。と。利。強。れ。た。よ。と。つ。身。の。多。あり。と。正。姫。の。兵。と
 忠義の。よ。と。と。國。家。は。多。し。其。底。績。た。よ。と。と。や。ら。ん。古。人。も。攻。ち。増
 何。と。と。や。ら。ん。古。人。も。攻。ち。増

令別山のある。に南。の。明。神。と。號。す。れ。初。め。と。の。中。生

同くはるるに南水の明神と號すれ初わるとの中世

今別山（らん）のあゝるに南水（らぎ）の明神と號すれ初わるとの中世
と正徳と久たぢと孫子（せんし）は子やる。正徳常より正徳下よ
成功と立ち事と孫是れをやるとやうに。よふとく。
そと術多するとく。そあゝ今よ正徳とさき世の民よある事
とまゝく。但正徳のよく絶倫（たつじん）の材とく。聖賢の道
を学ひす。孫是の術とのと案ひと。さき恨とく。一。
湊川（みなとがわ）あゝ自殺するとく。身正孝（まこと）と最後此一念と孫子
たるる。晒（はら）。

足利家の礼

足利一統の後幕下此人物とく。細川頼之とく。世は良

相少納言の徳も是の君に命とけ初いと輔けと奉じ
下と御坐れども老ぬれば材やいふも。幼少も小納
言と見ても君威と強す事と云ふも。若く陳善のまを用部とと
まらば。さきほ義は會弱の君あらし。其輔佐かたさの後いふ。
い。やう如美えいしほともやうく貴人そじ。その驕奢りょうせときほは。儂
逆げきと肆しりすらむ。わら。ねと。も。其源とのうら。ん。
是とともく。い。や。貴人様。うら。ん。其外。足利。赤松。各門
尤ちやう族ぞく。つ。とも。跋扈はくこ將軍しやうん。あらし。うら。ん。應仁おうにん文明ぶんめいの法
多。少。中。細川。名。山。黨たう。と。方。ら。澤。倉。中。足。利。上。杉。雄。平
以。日。和。合。就。く。虚むじき。月。す。い。ま。の。も。あ。ら。し。君。臣。相。害。

親族相殺。い。ま。の。毒鬼城どくきじやうの。よ。く。は。暴虎ぼうこ狼らう也。と。い。ふ。下

日月相合我々虚き月なり。其の如くは君臣相害。

親族相殺。その毒鬼域の如く。其暴虎狼也。天下
よ人倫の道絶たる。多る日月地は墜したる。やわらる。
乞とて古今礼世の極とし。之れ。之れ。李唐此
季又代の初。似る。つら。ぞや唐書と續。信宗昭
宗此何。其此君との度。多く。人臣の。よ。か
う。揚復共。水。水宗と已。多。て。真心。天子
や。い。と。古今。よ。や。多。す。や。ま。の。す。ま。た
う。如。し。其。後。我。知。近。代。の。野。史。中。新。事。此。人。禱。代
の。象。人。宵。や。や。わ。れ。と。い。ひ。す。わ。れ。と。い。ひ。す。ま。く。も
礼。世。の。風。俗。も。や。ま。る。も。う。知。る。す。ま。う。や。思。ひ。得。し。

後世の風俗

して是に應仁の後足利家代と改めたる。前後可と改めたる。
 其名為勇士。寒從飛藤。從^くわし^きき^はは。貴^い育^く勲^い舎^い。
 類^るや^る。ゆ^りく^く賢^い見^み得^え失^しと^し論^りす^る。及^て凡^ん。但^し孫^の舎^の上^に。
 然^ら此^の時^に。右^の回^り道^の權^を。我^が。名^の為^に其^の奉^をわ^り。ゆ^りく^く。ゆ^りく^く。ゆ^りく^く。
 と松^の氏^の山^の内^の扇^の谷^の支^の堂^の了^の了^のと^して^しる^る。山^の内^のと^して^しる^る。山^の内^のと^して^しる^る。
 け^の時^に越^の後^のの上^に松^の房^の顯^の山^の内^のの^の家^の改^の修^のく^く。其^の子^の顯^の定^のよ^り及^てる^る。
 道^の權^と其^の父^の道^の真^のよ^りく^く扇^の谷^のの上^に松^の定^の心^のと^して^しる^る。家^の老^の多^のと^して^しる^る。
 定^の心^と多^の子^のけ^く顯^の定^のや^ら嫡^の庶^のの^の義^と辨^し。軟^の強^の此^の子^のと^して^しる^る。
 篤^くく^く。扇^の谷^の此^の家^のと^して^しる^る。て^して^しる^る。我^の身^のの^の輔^の相^の多^のと^して^しる^る。甲^の斐^の。
 小^のわ^りの^の家^のと^して^しる^る。及^てく^く謀^のと^して^しる^る。山^の内^のの^の松^のと^して^しる^る。奪^の以^てく^く。六^の支^の上^の松^の石^の。

わ^りの^の家^のと^して^しる^る。及^てく^く謀^のと^して^しる^る。山^の内^のの^の松^のと^して^しる^る。奪^の以^てく^く。六^の支^の上^の松^の石^の。

もわく幾と及く謀をそとく山内の権を奪ひ一六歳上松石

わよつとけけ行は。終は鳥雅と振く。定中や回く頭定
ら為より後さきさき多し。甚く多し其材を底一身と保り
よあつたれは終る。あつたや我思をくれあれのみよあ
種と。文学よ高き。倭歌よあつた。あつた世やと保り
貴人ともつた。能くはと思ひて。感にす。世は保り
い守時と我合れとあつた。終るに保り。い終と世中をた権
敵よつた。時終はよあつた。中よとさあつた。あつた。慕
景集やと終。自ら。あつた。あつた。あつた。あつた。其中
よい終とのせと。其細書よ。康正元年のそ。康正の俊よ。か
あつた。味方もあつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あ

ずしやうしぬさしとる味方は成感はして、たゞ幾小傑
 憲^{のたまひ}之のやうにわすれぬ。自腹^はく、作兵と然る。ま、むやう、
 わる。わらうらうまわらうて、うらう死するも、信ら時、友次
 のうこのね、おれむとせやうも、う言わらう。味方、中村、治、就
 が、捕殺、京、重、頼、やう、京、家、治、人の、世、ま、志、付、て、形、形、は、技
 持、せ、し、ま、く、信、ら、う、ま、ん、敵、の、男、ま、栗、毛、お、れ、約、ま、く、
 ニ、ウ、リ、ア、ア、は、お、れ、の、紋、付、ら、う、ま、く、も、わ、ら、う、く、ち、を
 月、守、り、し、よ、お、れ、ひ、の、毛、ま、く、あ、ら、う、お、れ、ら、く、け、ら、ま、は、ら、う、ま、く
 う、ま、く、陰、と、お、れ、を、せ、ら、う、ま、く、月、の、お、れ、ま、敵、の、男、は、ま、く、あ、ら、う、ま、く、
 う、ま、く、中、村、お、れ、け、ら、う、ま、く、お、れ、を、お、れ、く、我、陣、は、ま、く、あ、ら、う、ま、く、う、ま、く、と

かん、落、し、け、ら、う、ま、く、お、れ、を、お、れ、く、な、男、お、れ、ま、く、あ、ら、う、ま、く、と

うしく中村をけしう前をぬく我陣のなまらうと。うしくと

たえ落しけ敷よ。ある壯年中もあしぬ男は父志を承りして
たけあうとあまの此志を承りぬ。整いんのわんを多やうにた
き志を承りおとさうとやう。あさうとさうとさうとさうとさうと
けやうと。中村をけしあゆむのやうと。あまの志を承りぬと。
あまの志を承りぬと。あまの志を承りぬと。あまの志を承りぬと。

あまの志を承りぬと。あまの志を承りぬと。あまの志を承りぬと。

あまの志を承りぬと。あまの志を承りぬと。あまの志を承りぬと。
あまの志を承りぬと。あまの志を承りぬと。あまの志を承りぬと。
あまの志を承りぬと。あまの志を承りぬと。あまの志を承りぬと。
あまの志を承りぬと。あまの志を承りぬと。あまの志を承りぬと。

孫子孫孫
卷之四

來元といふに其志の多し義とせんとすむわし首を刻ら
るゝも義とせしむるに必しも戰場に死とせんとすむ限
るゝに死我を弁む士のこゝろを義とせしむるに中ら其
志戰場に死とせんとすむわし首とせしむるに必しも
せしむるにわしを刻らるゝも義とせんとすむわし首
をもしむるにわしを刻らるゝも義とせんとすむわし首
や其會議とせしむるに必しも戰場に死とせんとすむ限
るゝも義とせしむるに必しも戰場に死とせんとすむ限
るゝも義とせしむるに必しも戰場に死とせんとすむ限
るゝも義とせしむるに必しも戰場に死とせんとすむ限

武田信繁

多し其利の季世天文永祿の万よむく賞と稱す人

武田信繁

多し是利兵の季世^{ナリ}為文永^シ祿の^シ乃^シより^シ至^ルく^シ賢^クと^シ稱^スす^ル人^{ナリ}
 あり。甲別^ニ武田^ノ信玄^ノの^シ身^ヲ友^ニ典^ニ厩^ニ武田^ノ信繁^ノを^シ守^ルり^シと
 代^ニ成功^シの^シ尚^ニひ^ク。信行^ノは^シ信玄^ノの^シ子^ニ高
 公^ト也^ト。信繁^ハ此^ノ賢^クと^シ稱^スす^ル人^{ナリ}也^{ナリ}。今^ハ信^ノ繁^ノを
 死^ニと^シす^ルして^シ其^ノ罪^ヲを^シ免^ルる^ル也^{ナリ}。信玄^ノの^シ父^ト信虎^ト。信
 繁^ハと^シて^シ信玄^ノを^シ廢^スする^ル也^{ナリ}。あり^シと^シて^シ信玄^ノの^シ父^ト子^トを^シ知^ルる^ル也^{ナリ}。
 一^ニ。信行^ハ、信玄^ノの^シ武^ノ器^ト也^{ナリ}。長^ク一^ニあり^シと^シて^シ信虎^ノ
 と^シす^ル也^{ナリ}。信玄^ノの^シ思^ハひ^ニ附^キ一^ニあり^シと^シて^シ信玄^ノと^シ稱^スす^ル也^{ナリ}。信虎^ノと^シす^ル也^{ナリ}。
 一^ニ。信行^ハ、信玄^ノと^シ距^キ一^ニあり^シと^シて^シ信虎^ノ甲^ノ別^ニあり^シと^シて^シ信虎^ノと^シす^ル也^{ナリ}。
 一^ニ。信行^ハ、信玄^ノと^シ距^キ一^ニあり^シと^シて^シ信虎^ノ甲^ノ別^ニあり^シと^シて^シ信虎^ノと^シす^ル也^{ナリ}。
 一^ニ。信行^ハ、信玄^ノと^シ距^キ一^ニあり^シと^シて^シ信虎^ノ甲^ノ別^ニあり^シと^シて^シ信虎^ノと^シす^ル也^{ナリ}。

武田信繁

四

新編 皇朝 卷之四

公とやうに、年々経多きも、信玄はのち父をせしむる國を
おとす。信虎は、多勢の流為し、一生をせん終る。信
繁、信虎の志子なりて、信玄と廢して、信繁と多しんと
す。其れ、信玄も知らず、事や、必忌悪也。一、我
も、國々のあつて、信玄、けり、危難の場なり。父
と、逃れず、後の人や、六、後、友を、能くわらん、我れ
も、子、又、信繁、後、敵の、乃、處、かり、信玄、信、之、見、す
の、乃、少、も、逃、云、わ、れ、す、と、き、う、ん、じ、う、後、漢、の、東、海、と
強、と、光、武、の、志、子、多、し、う、の、廢、也、も、多、く、信、廣、王、と、り、ま
す、信、繁、母、寵、の、あ、つ、て、す、と、く、ま、く、志、子、と、や、り、と、信、繁

けり、其後、明帝、能く、と、東、海、と、共、に、信、繁、子、一、と、上、を、奉
り、

人よ恥さらしく。又一條の合致の如く時敵ちうくせらる人

教を意のわらふはけの若くやわらふはけは任お我陣より
言わすく。其をよもは良の熟くゆらすと志す。其の言
威を思ふく。爾後とせし。易ふ。其の如剛知柔ふ。其の
やうに人のあつむとせし。命は法を社稷の慮あつむ。
ちやけ人とせし。世子とせし。監國の任とせし。甲列と
う滅とせし。其の命剛復の務頼とせし。他くとせし。
信玄死して。其の織田氏におあつむ。其の任とせし。其
やうに。其の言とせし。其の言とせし。
其の言とせし。

後日諸君を令けり。例の講とせし。其の言とせし。其の言とせし。

武回流の兵法と稱せらるるす。きく侍ら。亦日中其信
 英敵とくわらけく人数をわらうを法とす。とくまう。い
 かくけきす。のや。や。ま。を。用。兵。の。要。と。得。る。を。信。也。も。是
 かく毎夜利を得く管要のすや。思たるま。六丁をかく子。是
 も。以。信。之。神。と。い。ひ。序。は。兵。法。の。中。と。わ。ら。く。法。と。侍。ら。く。
 孫。日。一。の。兵。書。と。考。へ。ら。る。は。兵。術。の。要。と。孫。氏。の。十。之。篇。は
 わ。十。之。篇。の。要。と。軍。形。兵。勢。の。二。篇。は。わ。る。あ。る。や。く。用
 兵。の。法。と。形。勢。の。場。と。い。は。る。ま。う。ら。ん。ま。は。ら。く。常。法。と。い。は
 け。軍。形。と。軍。勢。と。を。軍。の。と。ま。や。い。え。ん。は。兵。勢。ハ。兵
 の。ま。ま。ひ。ま。と。兵。勢。個。子。や。い。え。ん。は。軍。形。と。形。勢。の。法。と。

て。兵。勢。と。合。戦。の。法。と。す。軍。形。と。形。勢。の。法。と。す。と。人。の。僅

わくもあきとやらは甚女よそよはくくやる中をわらは是よ

て勇怯の勢はあらず。強弱の形はあらずと云ふ也。但軍形は
たやらず。兵勢と軍形よりしては、我も多しと云ふと一軍形は
まがらず。士卒勇弱よりしては、必ず敗軍をなす。山のたは積
無定勝而後求我。敗兵先我而後求勝也。ゆゑ定勝無
軍敗はあらず。まがらず我をぬきし。必勝の者も多し定よりぬ
先勝よりしては、定勝は我ハ兵鈍らば我をあるは。敵と
破る事一破舟のたはるも。まがらず勝者之我若決積
水於千仞之谿者。敗也や。なんそと必勝の形定定す。わく
其勢はまがらず。我ハあらず。あらず。あらず。あらず
今我の場は狭くはゆれや。あらず。あらず。あらず。あらず

漢書卷之九

といふこと。あきま我婦とてや妻とつとたはくはゆき
 おきとくまはけ。士卒姑くくくく。其勢とまふふのやま。位
 といふ人教とあつた。けつてあつた。あつた。あつた。あつた。
 下。強ゆとてと海とて。激水之疾至於漂石者勢也。執鳥鳥
 之疾至於毀折者節也。故善戰者其勢險其氣詭。勢如張
 弩。氣如發機。やとつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 下。今とて。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 しくおれおれとて。水激して石のおもを漂とす。あつた。
 八。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 貴弱ま。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

初めにあつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

我弱き。と。た。ら。ん。と。き。鷹。執。馬。て。多。此。翅。と。ま。

即ち此にありて。禽カウよせ。ある。た。め。此。ま。り。さ。ん。ご。な。り。の。す。ら
舊。此。羽。片。の。ゆ。め。ま。り。の。毀。折。す。ら。ま。ま。き。ん。ん。よ。り。の。善。我
者。と。其。勢。必。險。一。く。其。兵。必。疲。一。足。も。所。向。と。ま。り。と。ま。り
い。ま。ら。一。毫。も。軍。法。を。敗。ま。り。ま。り。か。く。險。一。く。も。得。ま。り
將。弛。ま。り。の。ま。り。日。と。刻。一。く。急。ま。り。と。ま。り。と。ま。り。め。ん。
我。勝。と。ま。り。一。く。長。近。せ。ん。と。ま。り。た。り。に。任。た。り。其。兵。此
場。於。の。也。其。勢。弛。ひ。其。兵。疲。ま。り。士。卒。倦。怠。と。ま。り。必。擄。利。を
考。へ。一。く。さ。ん。は。勢。必。強。勢。必。強。勢。必。強。と。ま。り。必。ま。り。と。ま。り
と。ゆ。め。ま。り。其。如。後。機。と。ま。り。忽。急。ま。り。と。ま。り。と。ま。り。と。ま。り
と。ま。り。と。ま。り。と。ま。り。と。ま。り。と。ま。り。と。ま。り。と。ま。り。と。ま。り。と。ま。り

後漢書

卷之四

四

孫子よを治して善戦者求之於勢不責於人

故能擇人而任勢任勢者其用人也如轉木石木石之性

安則靜危則動方則止圓則行故善戰人之勢如轉圓

石於千仞之山者勢也孫武の一字一句も其此肯綮に

わあつさねとやう孫武の謀は其意の往やうの飛

孫賓韓信の兵法

さもや孫武の兵法其書わやせつる自に其子用て

敵を料し其わやと制するとき其子のつと呉王圖同は用

死を十と多きを呉王は使役せし事史記孫子の他は人

多し園固死のつ強楚を破る罪は其威徳は振八

定めて孫武の謀をよめておすやわおんその事實

より。園園のより強楚と破く罪又。長威は。は振一八。

定めく孫武。謀より。出。おす。やく。わ。お。い。い。この。事實
世は。傳。ら。れ。あ。る。く。て。や。い。ず。孫。武。後。孫。武。長。は。と。も
た。あ。く。長。功。た。下。は。着。ま。り。と。孫。臆。韓。信。の。為。り。ち。や。く。や
す。わ。り。と。孫。臆。と。孫。武。子。孫。や。り。と。先。祖。の。長。は
と。傳。く。と。齊。の。威。王。の。師。と。あ。り。け。し。時。魏。より。齊。の。與。國。趙
と。圍。く。と。威。王。將。田。忌。は。孫。臆。と。さ。く。副。く。趙。と。救。く。と。孫。臆
ハ。其。前。は。魏。將。龐。涓。と。も。は。長。は。と。あ。り。と。龐。涓。と。の。能
と。嫉。く。陰。に。擯。と。り。と。と。六。長。方。長。と。あ。り。け。し。後。を
多。く。車。中。は。坐。く。軍。の。指。圖。と。志。は。と。回。忌。す。と。趙。へ。ゆ。り
す。と。と。孫。臆。と。め。と。魏。趙。と。相。攻。め。と。魏

後漢書卷之四 四六

八幸之日少くして、士卒死せざるもの既なる事よ及んば、

さきよ退けられやとく。昔日歩軍とすくく騎兵とす
やく。二日の道と一日よりしる事。孫臏其の計を成るよ。昔
よ馬陵よ移りし。馬陵と昔よ阻隘多くして兵を休す也。
あゝよ麗涓を付江に置りや。四以付。大樹を斫り白きく。
麗涓は樹よ死せんと大書し多きとさく。吾射るよの事
す。よ万弩とす。休くく兵を夾く休きし。ゆきと筆と物
去く。昔よ火の事く。火の事とんく。万弩一隊よおの事也。
其の計を付けぬ。麗涓果して死す事とんく。の斫る本
の事よ。白書とんく。不書とんく。以。多よ火とす
く。火とく。燭とす。其書とんく。未。畢よ万弩

後漢書 卷之四

四

得よおとろくく。六魏昨ちよ破とく。龐涓自刎て。子よ
 堅子しほの名とす。一はとひく死よとち。龐涓の首よ孫臏
 と是あし。時人の足ときうらな分ちの首ときうらとく。つり
 ちらに。弟子の戒之はちよこれと戒之いづる出平爾者えんたにものへん也との語ひ
 了也。おひわとる。一。聖賢の云、け、あひゆるく。夷
 乞と小人の戒やすく。

ずく世よあし。しやくく。了也。わくまらち。まら多也。
 首ととる。くら。是と。翁。あは。し。ち。あ。は。の。つ。り。や。い。よ
 首ととる。まは。孫臏ハ。之。そ。ま。ら。や。り。あ。ち。あ。つ。は。よ
 毫と減しく。一。世。樹とまら。ま。く。入。せ。け。れ。し。の。き。く。

敵と形よと。是と。ら。ら。や。り。一。は。と。減。し。く。見。す。ま。は。

電と減しつて、在樹と云々、きく、凡そ、け、れ、り、の、き、く

敵と形とを、是ららとあり、はと、減し、て、見、す、と、は、
敵必、道と、信し、つ、む、き、相と、と、り、け、り、見、す、と、敵必、出、と、云、
乃、ら、右、と、左、と、六、万、弩、保、と、守、す、万、弩、保、と、守、す、と、敵、自、刻
く、死、す、と、せ、り、て、敵と、勢、と、の、せ、ら、ら、と、あり、く、敵と、料
し、く、兵、の、形、勢、と、熟、を、す、ん、と、あり、く、わ、ら、く、後、孫、武、の、後
一人、や、り、と、い、ふ、漢、の、初、と、い、ふ、と、信、の、法、の、中、に、韓、信、
と、い、ふ、兵、の、精、と、い、ふ、合、戦、の、と、い、ふ、と、あり、く、其、趙、と、い、ふ、
攻、め、時、有、る、の、陣、と、い、ふ、と、今、と、い、ふ、の、世、と、い、ふ、
本、に、信、は、右、信、山、陵、前、右、と、い、ふ、と、軍、形、の、と、
あり、と、信、は、右、信、山、陵、前、右、と、い、ふ、と、敵、と、同、く、変、化、す、と、い、ふ、軍、に

後漢書 卷之四 四九

も常放やうもあしけ時趙兵二十万と號す。漢兵數万ある
は其と皆ちわのよき勢なく決戰せんや。韓信あまよ
下しくあまきしとて陣をわたりて水に背する陣を
ハ死地やると一兵逃れずけいれり。遂にわたりて死す。楚
よのけり。あまきしとて陣をわたりて水に背する陣を
趙軍漢の軍ハ死地と號すとて必やち用さる。わ
けくあまきしとて陣をわたりて水に背する陣を
兵を撃つや。必一戦ハ勝利と得く。とて。る。とて。る。
あまきしの謀をけしとて。あまきし。あまきし。あまきし。あまきし。
とて。あまきし。あまきし。あまきし。あまきし。あまきし。あまきし。

あまきし。あまきし。あまきし。あまきし。あまきし。あまきし。

漢書卷之四十一

抄ししを巧くわく而て久くしやう。魯ろの忌こ也。況や魯ろとて
やまのば。昔こら多た一財さいを糜みし人ひとを殺ころし。すくく網あみを害がいと
駭おそしとす。すくしくらんひひ。蜀しやくの先せんを自みづかしくて。吳ごと
攻こうる時とき。七しち百ひやく言ごんと連れんひひ。二十じゅうに屯とんと多たく。吳ごや相あひ拒こめてす。年ねん
よるよ巧くわく而て久くしく。あまはははは。魯ろの意い沮こる。陸りく遜そんのあま
破やぶらるる。我われのあまくも。孟めい代だい上じやう松しょう武ぶ伯はくの支し虎こ年ねん雄ゆうしく。
いはままも。征せい伐はく殊しゆのあまあまわらん。軍ぐん令れい整せいしく。ここららあまらら
ん。我われも。先せん為た不可ふか勝しょうて。敵てきの可か勝しょうととははままととここららん。生せいよよ一いつ
我われのあまははととははととここららん。孟めい代だいの拒こめてる。年ねんとと強きやうくく
ややんん。又また巧くわくらら久くしくも。遂すいににあまはは功こうなりして。僅いっにに

其身そのみをを終はくく。網あみ滅めつしく。魯ろの多た一財さいを糜みし人ひとを殺ころし。すくく網あみを害がいと
駭おそしとす。すくしくらんひひ。蜀しやくの先せんを自みづかしくて。吳ごと
攻こうる時とき。七しち百ひやく言ごんと連れんひひ。二十じゅうに屯とんと多たく。吳ごや相あひ拒こめてす。年ねん
よるよ巧くわく而て久くしく。あまはははは。魯ろの意い沮こる。陸りく遜そんのあま
破やぶらるる。我われのあまくも。孟めい代だい上じやう松しょう武ぶ伯はくの支し虎こ年ねん雄ゆうしく。
いはままも。征せい伐はく殊しゆのあまあまわらん。軍ぐん令れい整せいしく。ここららあまらら
ん。我われも。先せん為た不可ふか勝しょうて。敵てきの可か勝しょうととははままととここららん。生せいよよ一いつ
我われのあまははととははととここららん。孟めい代だいの拒こめてる。年ねんとと強きやうくく
ややんん。又また巧くわくらら久くしくも。遂すいににあまはは功こうなりして。僅いっにに

ついで

無と詭送

他日強く教を以て命をせしむるは日昔承取物之類とは
 多し其に感服し侍ら世に無法と侍る人七十一才の長也
 大いこと此我田家之流也其の取実縁物中を括し之
 出ても生れし形勢やその河法中を及ぶ人其そく敵を
 下務あとし割きらるるやまらるるからきやうよりして思ひ
 侍るに其の後と承せしむる世に侍る人皆其の事なり
 と。其にすらすらと多し其を思ひ侍るは形勢を審み
 智謀をもちあはるる仁義の事なりわらきや聖賢の

道中をすらすらとありありと侍るは其の侍るは其の侍る

智謀をもつるは仁義の兵もわらざる也。聖賢の

道中をすうし多しは多しなり。仁義の兵もわらざる也。聖賢の
て。多しは多しなり。仁義の兵もわらざる也。聖賢の
権道もいふ也。仁義を割す。権道はしてハ。兵
の用ひるは道中くひ。仁義を割す。権道はしてハ。兵
ひる道中くひ。仁義を割す。権道はしてハ。兵
後世の兵もわらざる也。聖賢の
本甲冑の兵もわらざる也。聖賢の
古今の兵もわらざる也。聖賢の
銳士。魏の勇卒。齊の技撃。楚の
よ。本は仁義と崇ふ。仁義の兵もわらざる也。聖賢の

後世の兵もわらざる也。聖賢の

平定之禮（ひら）也。赴（き）幸。子也。此父兄也。衛（まも）也。臂（ひぢ）之頸（くび）自也。
捍（か）之（ま）也。仁義の兵といふ。桓文の兵と信義と也。
下。律令（りつれい）也。軍畏威（たを）一人も其義と諭（こ）を
す。是と其割の兵といふ。嬴秦の兵と多（い）く賞罰と
嚴（げん）也。首級（しゅき）と多（い）く兵と其割わらずと。是
ゆも士卒と淬（すい）励（れい）と骨（こつ）形（けい）と偪（お）ふ。敵（てき）も赴（き）
我（われ）此（こゝ）す。事と多（い）く。其強（つよ）き。魏齊の兵。此す
よ。甚優（よ）也。魏の兵と骨力の卒と莫（な）力。齊の兵と技
撃（げき）の材と選（えん）ひ。一朝（いち）もわけて敵や鬪（た）す。其兵た
多利と要（えい）して。あて死敵の志（し）や。そのも。

秦れ鋭士（えいし）なり。優（う）者（しや）なり。一切（い）は其力

多利と要してあつて死敵の志なり。そのものもついでに

秦は銳士を以てし。優者わるとして。一切は武力
とて取務の。すくなく無はわらずとさき。兵は古
割の兵を以てする。仁義の兵とす。僅は兵とす。凡
形勢智謀とす。ぬすやくは。氣を挫く。敵と料。
務ふとす。割。は。き。や。ま。仁義の兵。後世の兵。た
詐偽とあひ及。同と用。る。の。む。り。巧。ず。る。事。と。わ
る。く。ゆ。る。多。敵。や。射。あ。れ。は。あ。る。或。は。敵。は
銳氣と挫き。或は敵の情氣とす。或はあま。り。て。或は
險阻と過。ふ。と。く。敵。を。割。く。敵。は。割。せ。し。は。凡。敵。は
く。く。敵。は。致。ら。れ。る。ゆ。に。謀。を。と。ま。は。は。る。者。類

宋の時、^{えん}しよの義子。わが一將城を^こく敵の圍^うま^ま。
 突^{えん}天の事や^くく敵を^まま。我を^しし^じ。
 遠く城を^こく兵を^まま。一人の胃を^まま。腹中^ははた^く
 せ^まま。何と^まま。胃^まま。其人^たた^く
 何と^まま。敵を^まま。困^まま。量^まま。急^まま。
 出^まま。敵^まま。敗^まま。軍^まま。と^まま。
 け^まま。朱^まま。兵^まま。論^まま。や^まま。出^まま。兵^まま。何^まま。
 事^まま。作^まま。始^まま。乃^まま。中^まま。之^まま。傳^まま。
 ハ孔子も二軍と^まま。除^まま。本^まま。而^まま。懼^まま。好^まま。謀^まま。而^まま。成^まま。者^まま。
 せんとの^まま。兵^まま。の^まま。事^まま。ハ^まま。姑^まま。也^まま。武^まま。

の世^まま。や^まま。攻^まま。伐^まま。を^まま。争^まま。や^まま。

せんとの流しと異國の事ハ是を是に姑とて並に表す武家

の世はやまゝとよま。天下攻伐之法ややく。戰爭やしり
かりとす。建武以來官方表すこと。法國くもる方
まゝ。日本合戦く及ぶこと。一はも。法國併合の率と
わはやく。衆の多寡とくく。兵の強弱と争ひ。その成
策もめ。支軍よむ令とく。相撲角力の場たとく。一時
勝負と決するやとす。或は勝負もわ。或は負る時
おも。勝負も負も一とたす。しり。今士率と多く。こ
しく。やとぬ。やとぬ。編子と表。さゆ。齊の技撃魏
の官率とく。しり。足利氏の李世とく。英雄英雄起し。
官方。割據しく。兵と磨士と表。以り。了。後附後附緒しく。用

後附緒しく。用
五五

一、其兵勇没して百戦して挫けら。秦の殺士
 ともいふまじや。中中も或回と極やするをを號令備す。許
 中めり。所あり。律とともくす。六。極文のそ。割中もさ
 る。一。さ。二。か。おの。兵と。あ。ま。む。く。始。く。兵。は。や。備
 す。く。や。の。地。も。も。高。代。兵。家。若。成。と。號。す。く。人。多。く。ハ。の
 兵。は。と。傳。の。の。や。く。兵。は。の。と。や。く。敵。と。料。し。備。を
 と。割。す。の。謀。は。わ。り。と。つ。す。と。あ。ら。は。其。中。と。あ。ま。は。な
 く。し。き。人。と。兵。は。その。控。へ。て。國。家。と。治。の。乃。も。そ。よ。外。か
 所。ま。と。い。つ。あ。る。先。年。人。の。い。ひ。と。わ。ぶ。兵。家。の。役。と。孫
 子。此。兵。者。號。道。也。と。わ。る。と。兵。と。號。も。道。や。と。あ。し。

兵と號道やるといふは、兵は道に依りて一兵を號す

思ひ給ふやしきと建てるやうにやして儼とすやうにすま六八
 せき親さへうとくは給ふすよあはく狼狽しく多々おそ
 きものやうに尻却くとあはれ害きもおそく。正代迄儀礼家
 よわら宿老の武長とんらふそのころと兵衛の世と仰ぐ。此
 片ころらゆらよ尻親ころあぬふ。後多此場は降く其建
 てる事他人のあふきやわら尻親加賀よわしし時其先
 祖越後此場の家よはく一者わらく徳中とく。越後七
 の孝光よ堀監物やとく名わら者わら。監物二代あは二代監物長十五年
や争はく。最とよ満ちる。 堀の監物と父監物直政とんらふ人越後と侍人の郎中と。同書
 ありとやとくおけはく。越後とんらある若わらとく。かきと

飛くをよきと毎くと越後とも扱わとせく。下よ監物はる

中くは六向後江の得中もやする久くはあり。今とて人より取
 事にはとも傳文としてあり。君は此江事の何れ一河後
 一徳奉じし時を修すも極く月事と凡の中終王字は月とえ
 中事及びし事と常要の法としてあり。凡の中終王字は月とえ
 の事も見付事作としてあり。事としてあり。事としてあり。時
 も家志らばもよわす事ある物とくは計某の言と必
 志を修すとしてあり。事としてあり。事としてあり。事としてあり
 志を修すとしてあり。事としてあり。事としてあり。事としてあり
 凡は海法郷堂篇と續く君在る事と興く如多事とわら
 上事此初の威儀中適之類としてあり。又張子此況として

興く不忘向君也とも興くとしてあり。威儀中適中くよくあり。

と申す此類の威儀中適之類といふ。又張子此況を以て

興く不志向君也とも釈し之を威儀中適とく之を
之は此子の既と引る。不志向君といふは一經の義理も
わづらひ。之の意事ふわづらひと思ひ。其後付事と
きく。横渠の沈緊要なる事とす。ぬ。此監物と始
終吾々自と之躬さぬといふ。是則志意向君と此を
君は危後（危中）と君は侍坐する時此中一の事なり。其ま
監物とす。横渠樂々の沈とす。其中心を
中くもこの事也。其意とのけうら相付ら。奇特な事
とす。

大敵をやす

久寛永のち孫少くあらん。永井信濃守高政志を重し

畢しやうえんをくわんしてくわん任せしむるは故。其比井伊掃部政直まこと若
一代の元老少くおをせしむ。或時遊逸ゆいつして。我等事弱じやくじやく途
の身少く。特恩とくおんと養子やしんする。守職しゆしやくと侍しやくをわゆる御ごと
極ごくとしやくなるゆ。その事少くは元老功の以事少くは。我等
の身少くは。其の事少くは。其の事少くは。其の事少くは。其の事少くは。
あまは掃部政直まこと感かんして。其の特とく少くは。其の特とく少くは。其の特とく少くは。其の特とく少くは。
その事少くは。其の事少くは。其の事少くは。其の事少くは。其の事少くは。
切きやる。その事少くは。其の事少くは。其の事少くは。其の事少くは。
後のちは。其の事少くは。其の事少くは。其の事少くは。其の事少くは。
と。其の事少くは。其の事少くは。其の事少くは。其の事少くは。其の事少くは。

後集 卷之四 六廿

社は其人の尊ぶ如く。亦休意迄到と云ふ。掃部政
字術のわざし。何法もきうひもあけり。聖賢の教
よ叶へり。世は移りて。神務の事と云ふ。孝親武家代
よ。やましく。五百年以來。世は是等の入。わま。是等の事。あ
る。とき。い。え。い。や。り。し。

徳宗徳仁厚なる。不致や。も。さ。ま。よ。あ。り。て。謹ら。考。る。以
御尚家天下と志。所。し。や。り。て。仁。政。は。法。よ。廣。被。せ。り。あ。り。歴
代。殘。殺。の。風。交。り。て。古。お。れ。義。の。俗。と。あ。り。し。寛。永。の
曆。の。り。よ。お。く。在。廷。の。法。を。運。よ。あ。り。て。出。く。兼。化。輔。治
し。は。其。次。り。は。隆。治。な。り。し。今。其。へ。り。と。あ。り。

篤實簡重寛厚の長者也。其政と謀る。中。虚文

一。さういふ事とく職と無し。是はくも効とあるは
 敏也。功あるとんゆもさう事あるは。金穀のちやく。事実
 常より厚と下情を塞すゆき。政弊民瘼し。是より
 起る事し。是よりさうて。兵より限らば。治世共政も。拙
 生よりやして巧生とゆふ事とせむ。諸葛亮
 候の蜀は。けうも。お入相して。内外の任とさう。高世の
 材とさう。月とさう。用とさう。て。法とさう。衆思の益とある
 ぬ。僚佐の誅と求す。月とさう。む。其の地と處と。と。さう
 たり。其魏とさう。ぬ。我必捨く。六司馬懿。母とさう。虎
 のと。其益列と討す。七張亡會とせく。六孟獲と服し。

て天威とさう。その神速とさう。す。想ひ入らば。其度出師表

のよし其差列と討する七張亡命よせし六五獲ふ服

て天威とんどの律速するす想ひ入らじ其度出師表

よつらひ劉繇王朗各據州郡論安言計動引聖人群

疑滿腹衆務塞胸今歲不戰明年不征使孫策坐大

逐并江東と巧ま此害と禱するすめ白やるも但我

侯の度量規模とやよと孫策らるるあし今其ま

よよと孫策ら拙速巧久此法最軍團此龜鑑とて我

侯とともうすあしとをさし孫策も亦く傑の

孫也!

漢書卷之四

卷之四

駁其雜語卷四畢

駭世雜詠卷四畢

